

第3回美し国づくり大賞選評

審査経過

その土地、その地域固有の美しさと魅力を、住民・市民NPO・企業・行政など関係主体が協力し合って、創り育て、マネージメントしてゆくことで「美し国づくり」は実現する。美し国づくりへの取り組みは本来、全体性・総合性が重視されるべきであるが、より現実的な参考事例を発掘顕彰し全国発信すべく企図された本年度の「美し国づくり大賞」の公募では、昨今国民的関心が昂っている“ウッド・ファースト”すなわち『木』にフォーカスを当てて優秀な取り組みを募集した。

審査委員会は4月19日、事前に寄せられた委員各位の審査評を含めて2時間にわたり議論を深め「大賞」1点、「特別賞」2点を選考した。応募作はいずれも、十分な活動歴と活動内容を有する素晴らしいものばかりであったが、大賞には今年度テーマの『木』に直にフォーカスを当てた福井県の「今庄旅籠塾」の地道な取組を、また特別賞には東京都板橋区における市街地再開発に伴う緑と都市生活の再生「加賀まちづくり協議会」の取り組みを、さらには「大阪府岸和田土木事務所」による泉佐野丘陵緑地における放棄里山における住民参画型都市公園づくりへの取組を選考した。

『木』は、ふつう木造建築を連想するが、都会では樹木樹林を含む緑化や緑地を、また郊外における里山の保全と活用、さらには生物多様性保全と公園レクリエーションを楽しむアウトドアライフのやさしさまでを連想することもできる。このように考えれば、今回の「美し国づくり大賞」は『木』をめぐる多様な優良事例を顕彰し、この多様な取組に学ぶことの大きな意義を全国に発信することになると確信する。

審査評

美し国づくり大賞

特定非営利活動法人 今庄旅籠塾 「次代の担い手と共につくる今庄宿の町並み」

全国各地で歴史的町並み保存と伝統的建造物群の景観保全活動は広く定着し、地域活性化でのモデルも少なくない。そんななか後発組に属す福井県南越前町の今庄宿においては、研究者らの地道な調査活動を踏まえた住民主体の自立した生活者本位で次世代継承をめざす歴史と文化のまちづくりが目指されている。江戸期天保年間の記録では、戸数290軒余、うち旅籠55軒、茶屋15軒余で、現在も、道の形、短冊形屋敷割、また住民生活のあり様もほとんど変わらぬままで昔からの宿場町の面影を留めており、観光目的に造型化されていない日常性が今庄宿の魅力となっている。

今庄宿の規模は、長さ1km、幅200-400m。古来、軍事上も交通上も北陸道の要衝であり、鉄道の町、明治天皇巡幸の町であったひっそりとしたコンパクトな宿場町で始まった市民、地元建築家、福井高専学生や高校生等の参加による10棟の建物復元整備へのハード、そして古民家でのカフェ、そば屋営業から音楽会、演芸会など文化活動の場としての保存活用へのソフトまで、バランスのとれた地元本位のニューライフ創出への地道な取組は、ホンモノの美し国づくりへの基本態度とは何かを強く示唆するものでもあり、高く評価したい。

美し国づくり大賞 特別賞

加賀まちづくり協議会 「板橋区 加賀のまちづくり」

東京都板橋区加賀1丁目、2丁目地区は、江戸期加賀前田藩、江戸最大の下屋敷であった。陸軍兵器工場、研究所事業所、大規模マンション用地へと土地利用転換がすすむなか、板橋区の行政のみならず地元住民や地元企業、ディ

ベロッパー、プランナー等が、“加賀”をアイデンティティに四半世紀にわたり協働し、さらには地区計画、景観形成重点地区指定などを援用して安全安心、緑豊かな町づくりを実現してきた。

大都市における開発整備計画は、ややもすると経済的合理性が優先し、人工的で画一的な機能一点張りのまちづくりに堕しやすいが、ここでは地域全体が元々の加賀侯下屋敷であったという場所性を共有することで、歴史文化性を保存継承、そしてそこでの高質のアーバンライフを創出することで土地の価値を向上させようと、多様な主体が協議協力して緑と水・公園と広場・道・住居などの総合的な環境整備から、エリアマネジメントまでを自主運営してきた実績を高く評価したい。

美しくづくり大賞 特別賞

大阪府岸和田土木事務所 「山の辺の“えん”をテーマに、みんなでつくる あたらしい公園」

対象地は、大阪府泉佐野市南部の和泉葛城山系の前山に位置する里山75ヘクタールである。当初、関西空港周辺の産業団地として計画されたものの頓挫し、その後大阪府立の都市公園として整備することとなる。府は公園事業推進に当たって公園専門家、市民、地元行政の幅広い参画をすすめた。公園としてのインフラはもちろん、活動拠点のパークセンターと公園ボランティア：パーククラブなどの“えんづくりプログラム”の活動と発表場所は、府行政が整備したが、公園づくりの大半は企業の協賛を得て、毎年公募される公園ボランティア：パーククラブ会員（現在111名）の自主企画によってまさに市民参画手づくりですすめている。放棄されてきた藪化竹林や里山里池の手入れ活動そのものが都市住民や学校生徒との仲間づくりとアウトドアレクリエーション活動として歓迎され、一方で「住民によって造り続けられる公園」の話題は、泉佐野市の観光ルートに組み込まれるまでに広がり、付加価値を高めている。都市公園事業の新しいすすめ方の成功事例としても高く評価したい。